



突き刺すような強い日差しのもと、アリは懸命に食料を運んでいました。涼しい木陰では、キリギリスが歌ったり踊ったり跳ねたり飛んだりして、楽しそうに遊んでいました。

やがて夏が終わり、秋が過ぎて、寒い冬がやってきました。食べ物がなくなってしまうため、キリギリスは食べ物を分けてもらおうとアリのところへ行きました。すると、アリがキリギリスに言いました。「キリギリス君、夏の間、君は懸命に働いていた僕らを尻目ですと遊んで過ごしていたじゃないか。僕の忠告に耳も貸さずに、その羽根を使って飛んだり跳ねたりしていたよね」

「こんな時、今までのキリギリスだったら、頭を下げるだけ下げたアリの同情を買って作戦に出るはずでした。しかし、今回は違いました。キリギリスには、のんびきならぬ事情があったのです。そのことが分かるのは、次のような発言からでした。「アリ君、僕が思っているように、僕は、深いワケがあるんだ。聞いてくれるかい？」。思い出したくもない何かを思い出そうとするような悲哀な表情をつくり、キリギリスは深いため息をつきました。

そして、アリが返事を

するの待たずに話し始めました。「僕には婚約者がいた。『いた』という過去形。彼女の夢は花嫁さんになること。愛する彼女の夢をかなくてあ

文は
人なり



アリとキリギリス

「僕はなんてことをしてしまった。冷たい北風が吹く日だった。『僕はなんてことをしまつほうが賢明だ。しかし、自分に自信が持てないから、どうしても相手と比べたくなり、相手の優れている点に目が向いて、悲観したり落ち込んでみたりするのが人間の常ではないだろうか。そして、劣等感でクタクタになりながら、相手からどう見えるか、相手はどう思つかを絶えず気にして他人軸で生きている。他人と比べるのではなく、昨日の自分と比べる思考の癖。『自分史上最高を更新しながら生きていきたいものである。本を読む。国家資格に挑戦する。自己啓発に励む。コツコツと自分を磨いてキリギリスの分まで生きよう。アリはあふれてくる涙を拭いて懸命に前を向いた。』」

「僕はなんてことをしてしまった。冷たい北風が吹く日だった。『僕はなんてことをしまつほうが賢明だ。しかし、自分に自信が持てないから、どうしても相手と比べたくなり、相手の優れている点に目が向いて、悲観したり落ち込んでみたりするのが人間の常ではないだろうか。そして、劣等感でクタクタになりながら、相手からどう見えるか、相手はどう思つかを絶えず気にして他人軸で生きている。他人と比べるのではなく、昨日の自分と比べる思考の癖。『自分史上最高を更新しながら生きていきたいものである。本を読む。国家資格に挑戦する。自己啓発に励む。コツコツと自分を磨いてキリギリスの分まで生きよう。アリはあふれてくる涙を拭いて懸命に前を向いた。』」

「アリは懸命に働いて、その羽根を使って飛んだり跳ねたりしていたよね。僕が思っているように、僕は、深いワケがあるんだ。聞いてくれるかい？」。思い出したくもない何かを思い出そうとするような悲哀な表情をつくり、キリギリスは深いため息をつきました。

「アリは懸命に働いて、その羽根を使って飛んだり跳ねたりしていたよね。僕が思っているように、僕は、深いワケがあるんだ。聞いてくれるかい？」。思い出したくもない何かを思い出そうとするような悲哀な表情をつくり、キリギリスは深いため息をつきました。